

体系といふこと

室 住 一 妙

(一)、それは文化科学において、或ひは生命といはれるやうな、ものの本質を形成してゐる。又、その生命ともいはれるものは、おのづから体系的にあらはれてゐるとも想はれよう、ことを意味する。ともかく、今、私はかう假定してをいて、そこでわが宗学に於て生命とか精神とかいはれるものは、必ず体系的にとらへなくてはなるまいと信ずるし、またそう捉へない限りは、我々自身の上に主体化してゐることもできまい。現実には主体化しない限りは社会的行動も出てこない筈。すれば活きた宗教とはいへないことゝならう。そう信ずる故に、体系といふことを少し吟味してみる。

(二)、仏教学にしても宗学にしても、何らかの断片についての分析や調査考証やはみな、それゝゝ貴重な研究業績に相違なからうから、それはそれとして、実はそれらより、もっと切実な重要な問題が存するのではなからうか。即ち仏教の仏教たる所以、いや一般に宗教や教育や倫理の問題にしても、それらの根底をなしてゐると思はれる本質、精神・生命的といはれるものを確實にとらへることは、たしかに切実重要な第一義の問題である、そうした教学的使命も、必須な分枝或は中核の発展系列や関連に於てのみ諸多の文化・宗教等のそれゝゝの特殊性が位地づけられ価値も使命も見出されるのではなからうか。

紀要の方にすでに宗学を中心に、その提題の意義と必要性と中枢的結論をば、ほんの試案として呈出して見たが、その一分節をなす体系そのものの定義づけについては、ごく簡略にしてをいたから、今、こゝに余白をかりてその点をさらに考へたい。やゝ汎くみて漸次焦点づけるように。

(三)、われ／＼現在の通念として、体系とはある一のとまった個体を形成する骨格及び肉づけ、諸器官とそれをつなぐ系統からその中枢に及ぶ一全体の系列といふ意味に解されてゐるやうに思ふ。之に別に異議をいふべくもないが、たゞその点を類似のことばや概念と比較して、明確にするとともに、本質的構造、体系の理念といふものをうかがひたいと念じて思索をすゝめよう。

今こゝに掲げた、通念と私かに思ふものについて、みのがすことのできない点は、一のとまった個体といふのは本来すでにまとまった個体であつて、誰かゞまとめたのではないといふこと。後に論ずるやうに、本来性の個体といはれようものは幾多数へられようが、その中で最も身近なのは、われ／＼の生体で、無論、人工でゝきたのではなく、自然発生的にみられる。また個体性といふ点からだけでも厳しく追究すると、生ける個体こそ、眞の個体性といへるのではなからうか。その意味で生ける個体を主体とすると、そのとき客体視されるものも、(そこに非生の個体の広大なものも含めて)本来性は当然なくてはならぬ。そうした先天的本来の主体客体のうちに、生ける個体を最も中核的主体として焦点づけられる。たゞ一個体とみとめられるものについて、そのありのまゝにみるとき、「そうみえる—そう存在する。」といふより外はないやうな、一のワクがあるといへる。それは、生々運転營する生命体は厳たる構造をもつてゐる。この肉身の五体は、重要な感覚器官を具へた一の頭面を体軀がいたゞき、四肢は上下に之を支へ、運び行動する。その内部には、これらを立体活動のでき易いやうに仕組まれてゐる骨格が、諸多の神経系

をまとうてゐる。消化・呼吸・血管・筋肉等は之をまた保護し摂養してゐる生命の維持活動の資本系統がある。さらにこれらの諸活動を意識的に無意識的に兩系にわたって綜合司配する個体中枢がある。而もこの中枢にどう在るか
はよくわからぬ、その正体もわからぬ乍ら、最も重要な価値中枢もあるとみなくてはならぬ。そういふ我々の全体、
それを直ちに体系とはいはないで、そうせしめてゐる構造・系統を、抽象的なとらへ方で、そのやうにみられるも
の、そこにそのやうに存在するもの、それを体系といふやうである。

(四)、こゝに要慎して注意されねばならぬと思はれることは、我々がよく理論的研究や實際的工作過程に於て、組織とか組織化とかいふ、そのソシキといふことばの意味は、さきに述べた、そういふ在り方に於て存在してゐる体系の内部構造は、たしかに複雑微妙な一全体のソシキには通じようが、重要な区別を要すると思ふ。システムといふ語は体系とも組織とも訳される。(外語に厳密な区別をもつた語があるかどうかは知らないが。)つまり体系はそんなソシキやクミタテ(構造)をもつた活き／＼とはたらく体の系なのである。故にこの根元的な体系が、そうした組織構造をもつてゐるとして、そのやうな構造に組み織り成すことをソシキするとも、組織化とも体系化するともいふのは、副次的な転用とみられる。その著大な型が機械人間(サイバネテックス)であらう。自然科学ではたしかに雑多な資料を蒐集し、目録し、之を一往整理して分類し、さらに之をある目的便宜から、又ある立場から、いはゆる組織して……全体的一元的な構造とまでの理論的体系を目ざす。人間はその便宜や目的から自由に種々に之を駆使し工夫創作して、ます／＼複雑な高度のソシキ化キカイ化を進めて、人工衛星から天体旅行にまで往かうとする将来を近く望むに至つた。いはゆるソシキとは生ける体系が、みづから自身を範型としつゝ、体系化する尖端の機能であるとみられる。

そこで、組織と構造と体系とは一往概念的に明確に定義づけてもいゝかと思ふ。すなはち、体系とは生の個体に本来時間的・空間的に内在し、外の客体につながり乍ら、生々開展する在り方、即ち、生の必須的全一系統的在り方である。構造とは、体系に即した(範型)抽象化した空間的カマヘ・ツクリである。体系の方は時間的に發展段階により環境に適應して変化していくが、構造は時間面を捨象してゐる。但し諸段階の發展を一系列とみなして之をまとまつた経過・歷程とせば、正に時間的な体系といへる。組織とは、その空間的構造に似せて、人為的に便宜的に工作すること、又はその成果をいふ。かうした一往の定義もまた私なみの一のソシキ(語と概念の)ともいはいへよう。以上は単なる私の便宜上の定義づけとしても、たゞのことはやイミだけのことではなくして實在する体系・構造・組織について考へてみる。

(五)、一の生の個体があるとして、その関連する物質にも亦それ／＼の構造をもつてゐることは勿論、それは人間の観念的便宜からまた研究の過程からソシキを与へたとしても、「やはり地球は廻る」やうに實在してゐる構造だし本来的事であることは否めない。さりとして分子・原子構造が、生の体系的であるとは今のところいへないやうだ。それらの物質構造からどう微妙に○○したのか知れない神秘であらうが、ともかく生の個体が出て来た。旧約の創生記は大膽に、神が造つたと嘯してゐるが、ともかくその生の個をさゝえめぐる天と地、大宇宙もやはり、さきの定義からこゝに區別して構造であらう。即ち厳然とした巨大な物理的法則秩序を以て悠久に生成し運行してゐる。嚴たる秩序は認めつゝも余りに無限大につらなるから、構造といふ語がピッタリとしない感じは否めない。しかし秩序整然たる大空間大時間をコスモスといふのであらう。してみると、物質の極微構造も亦、同様に小コスモスとみなされる。さらに我々の個に内在する心性のそれには、なか／＼に測ることのできないコスモス、大小の計測を超えたものである

ことも認めなくてはならぬ。そうした無限大・無限小のコスモスの中間に超コスモスを孕んだ我々人間（主体）は、一の微妙な体系をもって生存してゐるやうである。

（六）、さてその人間はといへば、実はたゞその半面の主体をいふだけで、他の半面の客体は、当然広大なコスモスに密接にいな致命的につながった在り方をしてゐる。そこに生育し進化し文化し自覚し来った存在に外ならぬ。

こんなことを書き記してゐるのも、その文化的自覚の地平上の行為にすぎない。また我々が日常話してゐる単語にも、無尽のイミをふくめて安易に用いてゐる。そのことは主体客体交渉の複雑微妙な事例である。

こゝに且く自然科学的にこの主体の生理・心理的な在り方は今さらいふまでもない。たゞ、五体の最頂にのせた一頭面に重要な感覚器官のいくつかを具へ、而もその集中された顔面の色沢毛皺等々に内部体系の健否性格から超コスモスの動きまで、かなり敏感に閃光のやうに表現してゐる。いはゆる観相家が、その人の個性・経歴・運命までの過去現在未来を認め知るのも全く偉大な、ふしぎな体系なればこそである。その顔面の中でも、目は口以上に雄弁に正直に物語る由。これらのイミを強調して面子めんつとか面目めんぼくとか真面目しんめんぼくとかいふ文辞を用いるらしい。殊に真面目をマジメと訓ずるのは、超コスモスの中核のイミであらう。（その人の至誠・真骨頂・本性ほんしょう）俗に面目にかけてといふとき、生命をかへりみぬ……ひいては民族戦争や世界大戦にも及び得る。そういふ人間性一般の奥ふかい超コスモスにまで、うてばひゞくやうにつながつてゐる。凡そ生きとし生けるものゝこの誇り（自尊）は根づよくも深い、そういう体系でもある。頭部だけではなく全身の骨肉皮毛色爪爪歯の末梢にまで、その個性や運命や環境事情を物語り、血液型は性格も遺伝も、はては意識下の潜在意識の領域にも根をはってゐる体系である。

個人心理の在り方は、本能・感覚・知覚・情緒・概念などから、漸次進んで人格精神にまで総合されていくやうに

扱はれてきたが、それは必ずしも人間性人格性がさういふ経過をとるといふのではなく、いはゞ理解し易いための概念的組織に過ぎない。今日では原形質的本能心意の發展生長した結果について之を分析しまとめたものだといふに気づいて、児童・少青年心理の發達や、未開民族心理の領域が拓かれてきた。成人とか常態の心理状態において知情意の偏らない調和した在り方を健全人格とされるのも当然としてをく。ともかくもかうした人間性、殊に内面的人格形成や活動こそ、その微妙な機能の發達可能態に対して、あらゆる環境、自然的風土の生産条件や社会文化の歴史を通じて、その間、主体客体が相互にはたらかさひ、極言せば斗争し育成し影響し來った交渉の結果に外ならぬことも充分常識となつてゐる。朝起きるより夜寝るまで、死ぬるまで、否、生前死後、戴天地載、生育と文化の世界において昇華し來つた存在で、今年何月日にやうやく宇宙時代に入つたといはれるものゝ、実は悠久の太古からの宇宙人で幾千万年の將來も亦た同様。しかししたしかにより加速度的に科学技術的な知能工作活動は人類をして宇宙空間に活歩せしめるといふ見透しといふよりむしろ、はや一步をふみ出した。またこれまで日常雨を霰を手にうけたり躰をぬらしたりしたやうな何でもないことよりも、もっと激しく、生体が宇宙線に昼夜間断なく放射されてゐることも気づかれた。それがどれだけの生体に影響するかどうかは測定できないが、直接間接に人類生類は創生以来、不可測の宇宙線に操られてきた人形のやうにも思へてくる。然し今それらの諸制約を自覚し、一歩々々、科学と技術の触手を、大コスモス、小コスモスの中間に於て伸ばしつゝあるものは、確かに超コスモスの人類（その中枢的精神）である。そしてまたかうもいへ換へよう。大小コスモスの客体をふまえた超コスモスの主体、（客体的主体）は、主体的客体に転換する世紀に入ったとも。又は、「超コスモスが大小コスモスを体系化する時運」とも。

（七）、いま別に文化科学の面から考へるとなほ切実に体系の理念を明かにできまいか。文化科学一般は、当然人類

が自然に、（無意識無自覚的から）形成し來つたその時空にわたる研究であらうから、それ／＼の分野に自づと系列を形成する。どうともみればみられるとはいへ、その深い内面性には確乎として動かすべからざるもの、實在的にその時代社会にその人が行動した主体性が存する。その限り客体的主体・主体的客体の相関し相克する、その全一の体系は實在する。勿論觀念・理念的にである。

ひろく時代といひ社会といひ、みな人類の文化体系にそれ／＼の地点を占めてゐる。個人の哲学体系はもとより、たとひ概念的には不明確ながらも、その信念思想教義等も、群団や学派も同様。一般社会・民族乃至諸民族と及びその文化圏や歴史時代区劃などについても、すでに研究者自身の意識内に体系的な考へ方が根底にあつての結果であるし、ふかく考へればその根底にある体系的な考へ方といふのは、すでに歴史社会の現實的實在のイデーを対象としてゐるのである。対象のイデーは、現實的實在に即して対応してゐる。そしてその實在は今の我々主体の現實にまで生き／＼とつながつてゐるものではないか。文化科学のみならず、自然科学も亦、対象は一往はたしかに純客体とみなされるにしても、その實際研究は、主体の体系化的機能に外ならぬといへよう。高速度に進展やまない人類主体の体系化的活動が文化一般であるといへよう。文化科学も社会科学も自然科学も、文化・技術一般、人類の営為するすべては実に人類主体の組織化・体系化的機能なのではあるまいか。もとよりたゞ主体がはたらくといふ一方的能動ではなく、主体の中核的靈妙な体系、体系中の体系といふべき、超コスモスこそ、客體環境一般とのかかはりあり・はたらきあひの連鎖反応・相互映写をなして群より個へ・個より群へ、多方面な進展、工作発見發明の形成を哲學的理論で弁証法的ともいへようが、この相互交渉の意味を抽象局限した遊戯を最も通俗的一例として囲碁を挙げよう。即ちお互五分々の敵に対して虚々実々の手を下して、時空の全局面を充実していく。そこに相互の個性や運命を孕み、

展開して最後の勝負の局を結ぶのである。正に、はじめは無記の白紙的全面は両者の永い間のルールにおける経験的
打算と個性は、はげしい斗志の尖兵の一石となつていくとき、自づからにその時の両者の人格体系をからみあはした
系譜を刻みつける。また名もない草木が、種子・発芽生長開花結実の展開は、凡そ一年に二・三・四の季節を通して
くりかへされ、一年で円環的に完了するものもあらうし、二・三年乃至数十年で始めて開花結実するもあらう。而も
数十百千年の巨樹にいたつては、横断面にうるはしい年輪をみせる。そこに発芽以来の主体客体の育成交渉の過程を
正直に物語つてゐることは誰しも知つてゐる。

(八)、今やわれ／＼は個人民族人類等の文化史を通して、大小コスモスに直接対決し來つた、体系的年輪・構造を
我々人生觀のうちに、とり入れねばならぬのではなからうか。今日のいはゆる世界觀・宇宙觀が、幾億年といふ悠久
の時代をふまえ、光年単位の巨大な空間に未測のエネルギー線を浴びてゐることに気づかれてゐるが、実はそれは本
来の個体々系に組み織りなされてきてゐるのである。人類の自覚意識熾烈な創造意欲は、精密強力な機械的組織力を
以て、たくましく、大宇宙の時代と世界に一步ふみ出したのである。さて、こゝに、奇怪なことが起つた。人類の名
に於て、

「われ／＼はどこへ往くのか」といふ問ひである。世紀を蔽うた眩めく光茫のもとに、底しれぬ不安恐怖の影をま
とうて、市井庶民の胸そこに切実にうづいてゐる問ひである。

こゝに於て我々は最初の個体系の中核にもどらう。そして考へ直さう。今日の文化は一面物質的文化とも称される
やうに。大小コスモスに通じた、時間空間とエネルギーの科学と技術とを主軸とした体系化であつた。そういふイミ
の外化である。之に対して今内化の逆方向に、自己自身の在り方の方向を逆限定していく。もと／＼超コスモスの性

格は、外化への微妙な機能を發揮したが、内化への道は歴史的潮流から逸れて来たことも否めまい。それを自覚し内化への道を辿ることは、あるイミで新中世主義・後向きの方角・反歴史主義ともいはれよう。が然しどういはいはれようとも、果して之でいゝのか。これまでの社会が有機体であるかどうかといふ説は且くをくとして、全人類の世界が、たゞ一の運命共同体として、絶対的危機の地点に立たされたことはたしかである。永い間つゞけられてこゝまで来た試行錯誤は今や全く、一步の錯誤が、さらに再び試行することさへ許されない時点に到つたのである。この危い絶対絶命の時空の交点に喚ぶ人類全体の叫喚を耳にしない人間があるだらうか。そのとき新中世でも新太古でも、新しい神話でも新創生紀でも、すなほに謙虚によみかつ考へまたは創作していくべきだ。古聖の教学は、さう気づくのを待ち望んで二・三千年を経過し来つてゐたのではなからうか。

(九)、超コスモスとは仮りにこゝで靈性とよびかへてをく。それは確かに今日の外化的文化を生んだ、その機能的性格は客観化であらう。それはそのまゝ一種の超越的性格をもつ。それはまた反対に主観化の方角へ超越するとは、勝義のイミで道德律倫理宗教へのそれではなからうか。かうたゞ規定し去ることは今ひかえてをくとして、最も人間的良識水準に教網を投げられた釈尊の教をとつてみよう。原始仏教の旗印としての三法印は、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜だといはれる。その第一・二項は現実には普遍妥当してゐる真理である。そう第一・二項を体得することは単に絶望的にあきらめることではない。むしろ之を跳躍板として、八正道をふみ、涅槃に至るべきを宣言し主張し、懇切に教導されたのであることは今さらいふまでもない。生ずる者は必ず死す。生老病死の個体の運命は、すでに与へられた必然の法則であり乍ら、之をよく超越するの大道を示し導かれた。内在しつゝ超越せんとする、靈性の万人当然の契機に点火されたのである。焰々之がもえさかり、大乘仏教の法輪転は、絶対一乗の天日として光被するに至つ

た。即ち人類叡智の極を尽してもなほ不可測の、時空を包みつゝその微塵に内在して、教化やむなき本仏久遠の教化体系を、今こそすぐれた科学技術の光で見直さうとする。

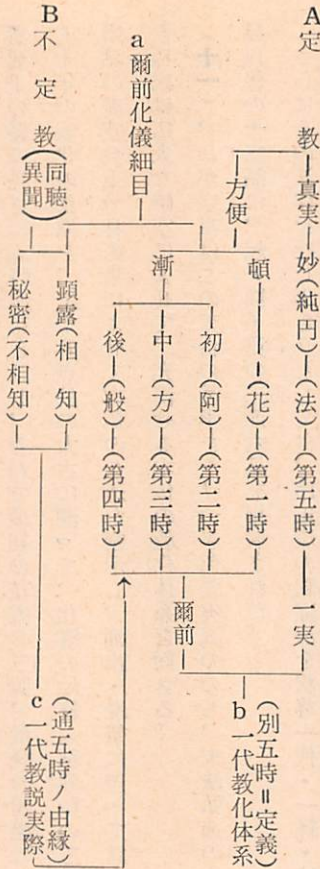
(十)、教といはれるものは、もとゞ成人の幼者に、聖賢の凡庶に伸ばされた導きの言葉であるとされてゐる。初は行儀や作法を手がかりとしてしつけ、漸次一往処世の秩序へと訓練しつゝ、内心の深みに徹して、世俗にあって一壺の水、一握の食に天を楽む底の境地に到らしめんとする。無常・苦難・逆境に処して悠久の大義に生きるところ、主觀的超越の立場から治国平天下の公道・政道を指示し、全人類はどこへ行くべきかをも教へるであらう。

仏教の初級といはれる小乗教もたしかに人生の根本的宿命から解脱することをまづ目標としてゐる。大乘教での厭離穢土欣求淨土、また基教・儒教等もそれ／＼、ニュアンスや具象的な構造は違ふが、それらの信条体系は、主觀的超越性をもつ。といふのは、我々個体系の心情にはそうした超越性的モチーフを内在せしめてゐるから、あらゆる道徳・宗教がひとしくそこに狙ひをつけてゐる所以。この個の全機性は極大極小の客体に時空に制約されつゝ超えようとしてゐる限り、すぐれた教家は之をどう捉へて教を施されたか。その点、仏教では、四悉檀の、世界の現実の主体・客体的事情を顧慮して人々に応同妥当する(歡喜益)、また個性の善の方面を生かし伸ばす為人(生善)、またその惡の面は矯正対治する対治(破惡)、かくて漸次に歪みを直し、汚や曇を除いて、その分々にまことの道理をさとしめる第一義(入理)、といふ四悉による四益は、通誠偈の大綱にも合致しよう。仏教がごく平俗正當な教としての在り方といへよう。四諦の法門は、世・出の因果体系で、八正道は修道体系、十二縁起は、生類一般の生死輪回の円環体系とともに、現実の主体内外が法眼淨に映された、觀法内容ともならう。三学は修道一般の重層構造、六度は自行・化他の諸条件。これらの根幹から技葉末梢の道品・八万四千の法門は展開される。經律論の三藏は大小幾千卷

の老大な典籍として産出されながら、一仏一代の教説を出でない。そうとせば、果して仏教は雲煙かなたにかすむ大洋を望むが如く、否支離滅裂、矛盾撞着の狂瀾怒濤の実状をばどう解すべきか。即ち体系としての仏教の問題ではあるまいか。之をば仏の眞の御精神（大慈悲と大智慧）から、鮮やかに裁き、統一しすべてがみな活かされたのが法花経である。その法花経の開頭統一性を教学的に樹立されたのが天台の教判である。こゝに今更いふまでもなからうが、天台がすぐれた仏教学者であるから、巧妙に組織し、体系化したといへば、一往さういへようが、実はむしろ法花経にそういう体系が本来在ったのを発見したのであると信ずる。ではそう信じたらいいとはいはれ、ばそれまでのことながら、そう信じなくてはならぬ、そうみなくては、全仏教そのものの生きた姿も性質も生命も失はれてしまう、そういう体系であるから。そこを強調するところに、天台法華宗の宗たる所以も、法華経の諸経中王たるの意味も、仏教が大覚世尊の教たる価値も見出されるのではあるまいか。この点は現代の一般学者から種々の難点も出されようが、之が単に信仰の立場からいふのではなしに、学的に、教学的に、体系といふアプリアリーから立てられ得ようといふのである。即ち仏意がはたらくとき当然体系的である。従て一代の諸経すべて、この見地からこそ目的の構造をもつ体系を見出す。即ち手段と目的、方便・真実、前権後実は一代を貫いてゐる。その方便に頓・漸あり、漸に初中後あり、かくて一代五時の當為的イデーが展開する。之は体系教判の定型で仏意を顕はす、別の五時とする。實際は仏の教化は対機説法で、頓・漸の内容はかなり前後交錯するであらう。之は仏の化用の自由さを現はすもので、通の五時とする。その間も必ず目的に別の五時の定型性は通五時を貫通してゐることは勿論である。今日仏教經典の科学的考証から、大乘非仏説・五時無根説などによって天台教学が根底から、くづれたやうに憂へる者もあらうが、よろしく大局的に考へ、天台の立説をすなほによみとることが大切であらう。今通別五時の眞意を明めるとともに、化儀四教

の構造からも考へてみる。化儀はいふまでもなく、仏の説化の実際的方法である。総じて四悉檀の因縁によるがそれでも万差の機根には、大小高低浅深の教説が、定則通りの理解や行証をもたらさない場合が甚だ多い。之を不定教といふ。その中でも、会座の人々が互に知り合うるときと、(顕露不定) 全く知られぬ秘密のとき、(秘密不定) とがある。さきの頓・漸の化儀と合せて四教とする。いづれも、爾前権教における調熟のやむを得ない仕儀なのである。

こゝに八教撰不や、頓・漸・不定等を併せ考へて、私に次の図を作つてみる。



Aは、仏意による一代教化体系が五時に開展する次第、Bは機情に随つての實際化用であるが、これ(B)だけでは収集つかぬ雜亂仏教に墮す。A(別五時)によって開顯されて始めて教化が完うする。機根の万差を調熟する方便に頓・漸の定式と不定の顯・秘の化儀とを併せて、之を化儀の細目、四教とする(a)。爾前四時にわたり通五時の由縁たる所(c)。それ故にbの別五時の各に年限を附定するのは、やはり諸経自らにさう説いてゐる傍証もあ

るが、大概についてのことである。実際に諸經の説時・成立年代には諸説の出るのは妨げないし、むしろ当然であらう。要はA（仏意の教化理念の体系Ⅱ定式）の定教と、B（機情に対する教化實際の儀式Ⅱ化用）の不定教との異同兼合をよく弁ふべきである。

之を天台は法花・爾前の相違の本質を三種教相とて、第一根性融不に弁じて開三顕一・開權顕実といひ、さらに長者窮子の譬で具さに五時次第を証し、兼ねて最初の花嚴の三照、最後の涅槃の五味で傍証する。第二教相では、一代五十年の教化の起原を、三千塵点劫の太古に溯って、化導の始終（種熟脱の三益）を明され、第三教相には、まづ宝塔品の虚空會上分身来集によせて本仏の久遠を密示し、涌出・寿量に至って露堂々、師弟の遠近を説く。即ち比類なき巧説は広大な時空によせて、充滿せる本仏の教化体系を顕さる。

（十一）、わが宗祖はこの天台の教学をうけつぎ色説実証ののち、末法弘通の大事を明確に本經の中に、迹門正宗八品以後の十三品に、起・顕・竟の三節六品を指摘された。

さらにその法体を詮じ出さうとしては、序正流の釈經法を釈尊一代・一經・迹・本・法界にかけて五重三段を以て掲げ、さらに究竟の正宗の一品二半の法体を在脱末種に異同を対弁し、本因本果の本法・本仏・本化の秘法を示さる。誠に雄大深遠の極致は、「所有ノ眞底、弥勒ノ識ルトコロニ非ザル」所以であらう。

だがこの大法を實際に弘通するの用意についても並々ならぬものがある。こゝに我々が必死の重点ををかなければ現実主体が生きようも生かされようもない。まづわれ／＼不可思議の人間はたゞ一個の体系ながら、本来に超コスモスの靈性を内在してゐるものである。だからこそ機といへよう。そも／＼教化対象を機といはうとするその教は、正にそこに非常な教の特質を自覚してゐると考へねばなるまい。それこそ前述の全仏教に外ならぬ。

この機は前述六〇九の如く、単なる一個体ではなく、大小コスモスの時空・主体客体を地盤にした個であるからに機は必ず幽久な時代と広汎な社会的存在である。そこを見究めて対象とするのではないならば、眞の対機説法ともいへないであらう。またかうした時国をせ負うた機は、内面、靈性的であるからに、いつからともいへない永恒の昔から、あらゆる場所事情に即して、ある必要性から或は合理的にか神秘的にか、教が超越性的主体にはたらきかけて來てゐる。その永い過程には進歩・保守の進退緩急や停滞はありながら、大よそのその方向は、いはゞ理想への進化、理想主義的であるといへる。従つてこれから教を弘めようとするものは必ず、教法流布の先後を考へて、進歩主義的に、これまでのものより、より一層深い強いすぐれた教法をとらねばならぬ。その選ぶべき基準はいふまでもなく、公正な教判、(教としての体系、仏教々主の仏の眞意に本づく体系、別五時、教理の浅深は化法四教に關連する)等に本づくべきである。念のために一言せば教判とは決して、各自の立場や私意による解釈や、それを本としたそこに理由づけや根拠づけんがための教判や体系ではなくして、そうみななくてはならぬ、仏御自身の究竟目的實現の体系、理念としての實在体系である。

なほ機・時・国の三は、実は分析もできぬ、綜合も無用な現実一般の全一体なのであるが、便宜上の三面の觀方なのである。それによつて周到深刻に生きた現實的靈性をつかむべき用意とか方法とかといつてもよい。その生きた靈性的現實を与件として、これまで何らかの幾たびの教の洗礼・陶冶をうけ來つた實際効果(正邪信誘)を認容し、その進化系列の、ある段階を認知し、いかなる教法が要請されるかの要件が出る。之に應じてのいはゞ時国相應の教法が応件として始めて弘通され得る。

この教・機・時・国・序の五綱こそ、眞の仏法弘通者の必須の資格とするといふ。

わが宗祖の立教は、この実践的教判から結帛されたものである。

(十二)、いふまでもないが、宗学は、特に純粹宗学は、以上のやうな意味に於いて、体系としての宗学でなくてはならぬと思ふ。

実は題目の一乗・折伏主義の立教が、いかにはたらいたか、いかに実証されたか、その行と証とが相互に対決・相発し、相照して行つたか。即ち宗祖一代の行実・教化・著作・内証等の諸体系が高次に綜合され展開されて、なほ万年の外、全世界に光被すべき所以の本質体系が、我々に自覚されて来るさういふ教学でなければならぬ。それが宗祖の法身としての精神・生命が、今の宇宙時代によみがへる契機であると思ふ。

(昭和卅二、十一、廿八)